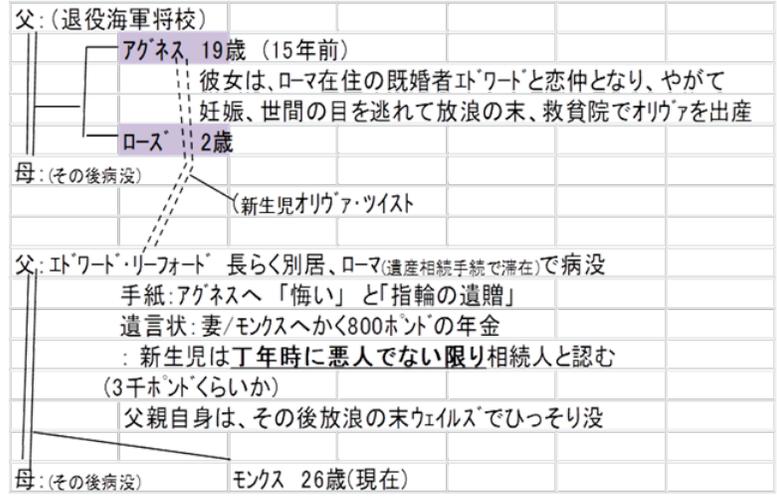


# I オリヴァ・ツイスト (ディケンズ 英)

参考: 岩波文庫 本多季子 訳



オリバーは、救貧院で身元も名前もわからない女性(本名アグネス)の私生児として生まれた。母親は産後まもなく亡くなったので、当地の教区吏のバンプルさんがそう命名した。それから8年たち(1834年)、国の財政措置がきびしくなり、食事は質も量も劣悪で、こどもらはいつもひもじい思いをしていた。食事の列にならんだオリヴァーは、あるとき“I want some more”と言ってしまったために厳しく叱られ、ついに救貧院を追い出された。運よく見つけた煙突

掃除屋や葬儀屋で働いたが、仲間内のいじめや疎外にあい、最後は覚悟を決め、彼は70マイル離れたロンドンへ逃亡した。途中、すりのジャック・ドーキングズという男と知りあい、ロンドンではユダヤ人で泥棒団のフェイスン親方のところへ連れてこられた。そこでオリヴァはその稼業を仕込まれた。最初の仕事は本屋の客を相手とするスリの相棒だった。ところが、スリ役がへまをしてすぐに逃走したが、オリヴァはただ茫然としていたため主犯とし

て警察に突き出され、裁判にかけられた。ただその事件の被害者のブラウンロー氏が、その子が犯人ではないと証言してくれたことで無罪放免となった。このブラウンロー氏はオリヴァに親近感をおぼえ、このとき少し熱病気味だったオリヴァを、ペンソングイルの自宅に引き取ってくれ、手厚く介抱された。同氏の優しさに触れて幸せな時間を過ごしていたオリヴァには、薄幸苦難の運命から抜け出せそうと希望の光が見えてきた。しかし、フェイスン親方らは泥棒集団の秘密がばれないかと心配だった。仲間の一人ビル・サイクスの情婦ナンシーは町に出てうまくオリヴァを探しだし、嫌がるオリヴァをもとの組織に連れもどした。オリヴァは不幸のどん底に舞いもどったようなものだが、でもナンシーのオリヴァを見つめる目はどこか優しくかった。一方ブラウンロー氏は、経緯不明のまま姿を消したオリヴァを探そうと新聞にまで広告をだした。ちょうどロンドンに来ていたオリヴァーの名付け親のバンプル氏がその広告を見て、ブラウンロー氏宅にやってきて、参考までにと、オリヴァの昔のことをありていに語った。

さて、泥棒見習いのオリヴァだが、ビルから一人前の泥棒になるよういっそうに仕事を仕込まれた。ナンシーは小さいときにフェイスンに拾われ、以来12年、こんな稼業をしてきた経験から下準備役になっているのだが、毎日震えているオリヴァにやさしくした。次の仕事の実地訓練はビルとオリヴァにバーニーとトビイが加わった。ねぐらから1/4マイルほど離れたチャートスイという所の一軒家メリイ邸が今夜の狙いだった。そこへの押し込みで、トビイは瞬く間に壁にのぼってオリヴァを引き上げた。オリヴァは恐怖で

気も狂いそうだった。ビルはオリヴァに、部屋に入って階段を上がり、ホールを通過して表玄関に行つて鍵を外して俺たちを入れるんだ、と指示した。オリヴァは中途までこれに従ったが、途中で心を変え、家の人に急を知らせた。

途中から手筈の変わったことに気づいたビルは、オリヴァを制止しようとピストルを撃った。トビイとバーニーは慌ててしまい、ビルも即座にここから逃亡した。オリヴァは独り残された。親方にとっては押し込みの失敗よりも、オリヴァの生死不明の方がショックだった。フェイスン親方のその事態に猛り狂うように怒っているのを見たナンシーは、親方を見直した。幸いオリヴァは、意識を失って倒れ、意外にもその家の人に助けをもらい、寝室にまで運ばれ、医者と呼ばれた。メリイ夫人とその養女ローズ嬢の二人のなせることだった。とくにローズ嬢は主客転倒ではと思えるほどの優しさをこの怪しい少年にかけた。医者も驚いた。医者さめた目に対し、ローズ嬢は、「このかよわい男の子が、すすんで、世の中からすてられた極悪人の仲間にはいったと、お信じになれますか」言った。こうしてオリヴァはこの二人の女性から介抱され、生まれて初めて愛されている実感を受けた。二人は、その後警官が来た時、「気の毒な少年を預かっているのです」と答えるのみですませた。オリヴァはここで幸福だったが、ブラウンロー氏のことが気になっていた。そこでオリヴァは彼の住所を知っていたのでそこを訪ねたが、その扉には「貸家」という紙が貼られていた。近所の人は、同氏は西インド諸島にいったとのことだ。なにやら親族調査のためだそうだ。

ところで、ローズ嬢が病気になり一時危篤になったことがあったが、その後すぐに従兄のハリーが呼ばれた。どうやら二人は、昔は恋人だったが、最近ローズ嬢がことさら慎んでいるとのこと。その後うれしいことに、ローズ嬢の容態が回復した。二人はぎこちない感情のまま、昔の愛の日々はもはや還らぬものと覚悟して別れたが、でも明らかに彼女の心の中では、ハリーへの思いが埋火のよう静かに燃えていた。

バンプル氏は救貧院の居間に坐っていた。彼はもと看護婦長のコーニー夫人と結婚してこの院長をしている。彼が以前コーニーから聞いた話だが、すなわち、オリヴァの母親が亡くなったときのことだが、そのとき立ち会ったのは老婆サリーだけだったという。老婆は、オリヴァの母親がその絶命寸前に、身に着けていた金の指輪とロケットペンダントを、大事に預かっておいてほしいと頼まれ、老婆はそれを大事に預かっていたが、いつしか欲に目がくらみ、それを質草にしたそう。ところがこのサリー老婆も老い先が短くなってきて、人生を顧みて罪深さを感じ、その経緯をコーニーとバンプルに話し、あわせて質札を渡した。サリー老婆はその後亡くなった。さてそれを聞いたバンプルは、はたしてどうすべきかで悩んだ。その発端は、彼が名づけ親となったオリヴァのことだったのだから。

そんなバンプルのところへ見知らぬ男がやってきた。男は12年前のことで遠回しにオリヴァのことを尋ねた。男は相応の礼を尽くしたいといったので人のいいバンプルと女房のコーニーは、男に話をしてやった。男の名はモクスといい、究極の目的はオリヴァの母親は何かを残したはずだ、それは何かをつかむことだった。コーニーは25ポンドで話してやった。モクスの狙いは質物のことだった。そして質札はいまその机の上にありますよと、コーニーは言った。

さて、フェイスン親方らの話になるが、——いま、モクスはこの親方の中に入りこんでいた。ある日、ナンシーが今日はメリイ夫人を訪ねた。夫人宅の取次の人たちは、ナンシーのなりを見て、ろくでもない女と見たが、とりあえずローズ嬢に取次いだ。ナンシーはローズ嬢に、自分がオリヴァをブラウンロー氏の

家から連れ去って以降の経緯をすべて話した。そしていまモクスという男が自分らのところへきており、どういう意味か分からないが、”オリヴァを泥棒に仕立て上げたい“と考えているのを話した。ローズ嬢がナンシーに、どうしてそんなことをわざわざ自分に話にきたのかと訊くと、ナンシーは虚心坦懐に、あんな純真なオリヴァを、自分らの悪人世界に引きずりこんでしまい、とくに自分がそれを強引にしたことに贖罪意識を感じているからだと答えた。この正直な心に打たれたローズは、ナンシーとこれからも人目につかないでこっそり会いましょうと語り、そのための方法(夜11時～12時にロンドン橋上で)を約束した。だが何よりもローズ嬢が願ったのは、ナンシーが気の毒なほど悪の世界に入りこんでいても優しい心の持ち主だったので、ナンシーについてもそこから抜け出るのを救ってやりたかった。だが現実の中、いま具体的に手を下せる方法は浮かんでこなかった。

ブラウンロー氏がロンドンに帰っていた。今はストランド街のクレイヴン通りに住まいしているのを、オリヴァは偶然、同氏の執事に際会して聞くことができた。それをオリヴァから聞いたローズ嬢は矢も楯もたまらず、オリヴァといっしょに氏を訪ねた。だが、まずは氏の家のドアをたたくのはローズ嬢に任せた。というのは、ブラウンロー氏は、オリヴァが自分の前から姿を消したのは、自分への裏切りだと誤解しているだろうからと思ったからだ。確かにドア越しの話では、ブラウンロー氏はオリヴァに、いい気持ちは持っていないかった。だがローズから経緯を聞いてほしいに気持ちが変わった。「それでオリヴァはいまどこ？」と訊いたので、ローズは「あの馬車の中です」と答えた。あとは涙と興奮ばかりだった。これですべては解決したかに思えたが、もう一つ危険が残っていた、それはモクスがオリヴァを狙っていることだった。

ここに男女の二人ずれ、ホルター・クレイボールとシャーロットがいる。二人はロンドンにやってきてスリー・クリブルズという安宿にとまっていた。ここはフェイキン一家の隠れたまり場だ。この二人の仕事はコリ泥で、それで早速に親方の手下になった。ここで親方の考えているのは、一家の腕利きスリ、ドーキンスが昨日から拘留されている警察の中に入りこんで、彼にかかわる情報をとってくることだった。その役目にちょうどこのホルターを使った。ホルターはコベント・ガーデンの市場からやってきた田舎者という役回りにぴったりで、難なく本日の被疑者の群れに入りこんだ。それは裁判の法廷につながっていた。法廷にはちょうどドーキンスが立っており、審理は銀の煙草入れのスリ事件だった。ここでの審理のありさまについてホルターはまたうまく警察署から抜け出てきて、親方に報告した。

さて、フェイキン、ビル、ナンシーが居て、ちょうど時計が夜の11時を打った時、ナンシーが座をはずそうとしたのをビルが怪しいとみて引き留めた。ビルは、このナンシーに新しい男ができて、俺たちの秘密をばらしてしまうのではないかと勘繰ったのだった。そこで親方はナンシーを泳がせることにして、ホルターに後をつけさせた。ナンシーはその試行七日目でロンドン橋に来た。そこでローズ嬢とブラウンロー氏に会った。ブラウンロー氏は、フェイキン一家の居所を知りたがったが、ナンシーはそれを拒否した。それは、『私もみんないっしょに同じ道を歩いてきました。悪い人たちですが、誰でも私を裏切ろうとすれば、できたのに、誰もそれはしなかったのですから、私だって、あの人たちを裏切りはできません』ということだった。ブラウンロー氏は、「手下どもには手を出さない、フェイキンは君の承諾なしには逮捕しない」と司法取引を提案した。ナンシーがそれをローズ嬢に約束できるかと問うと、ブラウンロー氏は約束した。別れ際、ナンシーは、ローズ嬢から形見の品としてハンカチを求めた。この一部始終を見ていたホルターは親方に進出した。事の顛末を聞いたビルは怒りまくってナンシーに毒づいた。ナンシーは、司法取引

の内容を説明したが、ビルはそれに理解どころか猛反発し、問答無用に彼女を撲殺した。ビルはあちこちさ迷った。ロンドン近郊のハットフィールドまで来た。ここで昨夜の自分の犯行を噂で聞いたので、さらにサンタルパンズ目指していったが、罪の意識が十倍にもなって彼を襲ってきた。ある日、モクスがブラウンロー氏宅を訪れた。

二人はもう互いの関係を知っていた。すなわち、二人の父親はブラウンロー氏の友人だったのだ。ブラウンロー氏は、ここでモクスの知らない事実を彼に語った。それは、モクスに腹違いの弟がいて【あとは本稿冒頭の人物関係】についてブラウンロー氏から説明を受けた。それは初めて聞くことだった。ブラウンロー氏は、この関係を調べるために西インド諸島にも出かけていっていたのだ。

フェイキンの手下たちが、テムズ川沿いの汚らしい一角に集まっていた。フェイキンはすでに警察に前日につかまっていた。ほかに捕まった者がいて、ここにはいまだ辛うじて逃れてきた者たちばかりだ。張り込んでいる警察がそこへビルの飼犬がやってきたのを見て、彼らの所在を確信した。やがて遅れてビルがやってきて大捕物がはじまった。ビルは前の堀に飛び込んで逃げようと綱をたぐりよせ屋根に駆け上がった。それから綱の一端を煙突に結わえ、他方に輪を作って堀に飛び込もうとした。岸辺には群衆が轟めいていた。彼は叫び声を発したが、その体は平衡を失って欄干から転げ落ちた。彼は小刀を握りしめたまま綱にぶら下がった形となり最後は堀に落ちて死んでしまった。

さてオリヴァから一切の恐怖は除去された。オリヴァとブラウンロー氏、メリイ夫人に、ローズ嬢、医師のロスバーン氏らは、オリヴァの出生地に向かって馬車を飛ばしていた。馬車から見る光景に、オリヴァはあの逃避行の晩のことを思い出していた。ここでブラウンロー氏の兼ねてからの友人グリムウイグ氏を訪ねた。グリムウイグ氏はさらに手配をして、自宅に一人の男を連れてきていた。オリヴァはそれを見て驚いた。あの親方の下で見かけた男、モクスだった。彼に一瞬戦慄が走った。が、これはどうしてもせねばならない仕事ですから、と断ったうえでブラウンロー氏は語った。ブラウンロー氏はモクスに向かって、「この子オリヴァは、私の親友エドワード・リーフォードが、哀れな年若きアグネス・フリミングに産ませた私生児で、君(モクス)の異母弟になります。この子はここの救貧院で生まれました。」と説明した。そして人物関係のことも説明した。——次に、モクスには不都合なことながら、あえてモクスの前で、彼がフェイキン親方に接近した動機を説明した。すなわち、モクスがオリヴァに不利な情報をもってフェイキンに接近し、『オリヴァを悪に染めることを条件に多額の謝礼を約束したこと』だ。モクスは、母親から父親がローマで病没したときに、残された遺言状のなかに、腹違いの子がいるようで、その子が無頼漢でないかぎり相続権を認める旨を表明していたのを知らされた。モクスは、ならばその子が無頼漢になるように陥とし込めば相続を独占できると考えたのだ。オリヴァはそれを聞いてつらかったが、今となってはモクスに悪感情を持ちたくなかった。この人物関係が明らかになることで、さらに意外なことが分かった。ローズ嬢はオリヴァの母の妹であること、オリヴァとモクスの父エドワード・リーフォードはブラウンロー氏の親友だったのが分かった。かくしてオリヴァは紳士ブラウンロー氏とともに幸せに暮らすこととなったし、ローズ嬢はもとの鞆に納まった形で従兄のハリと結婚した。

一方、フェイキン親方は、裁判で死刑となった。その処刑前夜、オリヴァはフェイキンを訪ねた。フェイキンは恐怖に震え半ば発狂していた。オリヴァは一時世話になったことの御礼が言いたかった。涙顔でフェイキンに礼を言い、そして神の祝福を祈った。

## II 藤十郎の恋、恩讐の彼方に（菊池 寛）

元禄十年頃のこと、京は四条河原中島にかかる都万太夫座の座元、名人と評判の坂田藤十郎でも、最近江戸からやってきた中村七三郎の人氣が急上昇となっているのが気になっていた。今次の戯作は「大経師昔暦」。ただその中には人妻との不倫の場面があって、それをどう演じたらいいか藤十郎は迷っていた。何しろ実際の不倫はきついご法度であり、「学ぶ」機会もなかったからだ。そこで藤十郎は、立女形の霧浪千寿を相手にその所作を日々考えたがなかなか分からない。そこで、藤十郎が考えたのは、実際に人妻と恋をし、そのとき女がどういう気持ちになり、どういう表情をし、そういう所作をするかを捉えてみたいというものだった。そこで、なかなかの美貌の持ち主、芝居茶屋の宗清の女房お梶を相手に恋路に誘った。座の離れ座敷にいたる長い廊下の隅で、何か書き物を手に悩む姿を見せながら、お梶を待った。そし彼女を呼びとめ、別室に誘った。「のうお梶どの。そなたは、藤十郎の嘘偽りのない本心を、聞かれて、藤十郎の恋を、あわれと思わぬか。二十年来、忍びに忍んで来た恋を、あわれとは思さぬか、さりとは、強いお人じゃのう。』お梶は、最初は戯れ言と相手にしなかったが、流石は役者坂田藤十郎の“演技力”にからめとられてしまい、すっかりその気になってしまった。お梶は震えながらそれは本心かと訊いた。すると藤十郎もおなじく震えながら、『てんごうをいうてなるものか。人妻に言寄るからは命を投げ出しての恋じゃ』そして今や後戻りできない、陶然とした絶望感と淫靡な無力感にひたっていた。藤十郎はお梶のその瞬間、瞬間のものの言い、表情、所作をしっかりと自分の脳裏に焼きつけた。

さて、その後しばらくして、座内で噂がたった。「藤十郎どのは、今度の狂言の工夫に悩んだ揚げ句、ある茶屋の女房に恋をしかけ、密夫の心持や、しぐさの形を付けたということじゃが――」役者どうしの酒の席で、藤十郎は千寿にこう切り出した。『千寿どの安堵めされい。藤十郎、この度の狂言の工夫が悉く成りもうしたわ』今やすっかり自身をつけた藤十郎だった。幕が上がろうとしたとき、奥の楽屋で、「自害じゃ、自害じゃ」の声がした。それがお梶だとほどなく藤十郎にもわかった。藤十郎はお梶の遺骸を見て恐怖におののいた。が、急に気を変えて、「なんの心配なことがあるものか。藤十郎の芸の人氣が女子一人の命などで傷つけられてよいものか。――さあ、千寿どの舞台じゃ」千寿は「あいのう」と受けた。藤十郎は一旦舞台に立ったが、――また引返して思い決したように退場した。

浅草田原町の旗本中川三郎兵衛の奉公人、市九郎は、主人の愛妾お弓との不義密通が主人に露見した折、手打ちにされる直前に、とっさの反撃から主人を斬ってしまった。流浪の途中、美濃大垣で出家得度させてもらい、名を了海と改め、諸国行脚の旅に出た。江戸出奔から3年後、九州豊前の宇佐八幡宮の近く、山国川沿いの羅漢寺まで来た。その馬子から、川沿いが通行の難所で、時に事故で足を踏みはずして死ぬ者もいると聞き、了海

は一念発起してそこを掘削して安全に通行できるようにしようと誓願を立てた。一心不乱に取り組む僧に、近郷の人々は遠巻きに見るばかり。18年目になって中津藩の計らいで石工が協力してくれだした。一方、中川三郎兵衛の子、実之助は13歳で江戸に出て19歳で免許皆伝となったのち、仇討ちの旅に出た。27歳のとき九州・中津城下へ来たとき、山国川沿いの不思議な僧がいるのを聞き、素性を知って確信した。鬼気迫る様相で鑿をふるっている僧に実之助が覚悟して名乗ったところ、僧了海は観念して素直に斬られるのを受け入れた。はや実之助が刀を抜きかかったとき石工たちが必死に止めた。そして石工の棟梁の計らいで、洞門の開通まで仇討ちは日延べすることになった。実之助はその工事の終わるのを待った、しかしなかなか終わらない。実之助はしびれを切らして自ら開削を手伝った。それでも工事は遅々としたものだった。

了海が掘り始めてから21年目、実之助が来て1年6ヵ月、延享3年（1746年）9月10日の夜九つ近く、ようやく洞門は開通した。約束通り了海は実之助に自分を討てと申し出た。しかし、実之助は了海にすがりついて号泣するばかりだった。もはや実之助に仇討ちという思いは消えていた。

## III 冬の蠅（梶井基次郎 六稜32期）

冬の蠅は、氣息奄々としながらも私のいじくりになお飛び去る余力を持っているようだ、そんなことを考えながら、ある男のこと（＝自分のこと）を小説にしてみた。――

私は、冬が来て日光浴を始めた。谷間の温泉宿。遅い日光の差し込みのなかで外を見ていると、蜘蛛が巣ごと風にふかれて飛んで行くのが見える。昆虫はそれぞれに空にあがる。梢からは白い蒸気のようなものが上がるが、それは霜の蒸発ではなく、微粒子のような羽虫が風にむらがっているのだ。開け放った窓から蠅がやってきては天井の陽だまりにとまる。ここで日光欲をした蠅は、両脚をあげて腋の下をかいたり、手をすりあわせたりをして、それからまた弱々しく飛び発つ。虻や蜂があんなに元気に外気の中で飛んでいるのに、この蠅はこの病人の部屋にとどまっている。しかし、驚いたことに、こんな部屋の中で彼らは交尾をしている。「生きんとする意志」であろう。

牛乳の瓶の内側に彼らは入ってくる。そして、そのまどろみに体を取られてなかなか出るのに難儀している。私は、残酷かもしれないが、それを助けてやろうとは思わない。ただ倦怠だったからだ。私は、ここに小説を書こう――題は「日光浴をしながら太陽をにくんでいる男」としよう。

私は、慢性の「疲労」からこの温泉宿で、もう二た冬を過ごしている。日光浴をするときは太陽を憎んでばかりいる。私を生かさず、私をうっとりさせただけの生の幻影で、太

太陽は私を瞞そうとする。それが癪にさわる。反対に、狂人のように悶え、緊迫衣を引裂き、私を殺すであろう酷寒の中に、私はひたすらに自由を欲した。ほかほかとした快感は、その後の虚無的な疲れで病人を打ち負かしてしまう。それが私に嫌悪を増幅させる結果となっている。

私が最後に都会にいたころ、冬至の頃だった。自分の窓の風景から消えていく日影に限りない愛惜をおぼえた。墨汁のようにこみあげてくる悔恨といらだたしさの感情でそれを眺めていた。そして落日を見ようと思ひ、慌てふためいて町をうろうろとしたことがあった。でも今の私にはそんな愛惜はなかった。

(今にもどって、再び温泉宿の窓から)

谷には檜や椎の常緑樹に交じって一本の落葉樹があった。一つのものには必ずまた別の色あいが混じるものだ。日光光線には偏頗があり、それがいろいろの作用して日影は日向との対照で闇となり、雑多な混濁を形成している。そこには感情の弛緩があり、神経の鈍麻があり、理性の偽善がある。これが世間でいう幸福の条件だろう。私は以前とちがって“黄昏”を待つようになった。空から道に降りてくる反射光線は、たとえ私が幸福でなくても、心を透き徹らせる風景だった。

私が読書をしていると、また彼ら(蠅)はやってきた。やがて寝床に入ると天井にはりついた。彼らを眺めていると、廓寥とした深夜の気配がしみ込んできた。火鉢の火は消え、硝子窓の湯気も消えた。なんという倦怠、因循だ。一体いつになったらこれにけりがつくのか。

その日は温かい日だった、私は村の郵便局に手紙を出しにいった。宿に帰るのが億劫になった、たまたまそこに乗合自動車が止まっていたので、当てもなくそれに乗った。三里の峠を越えて、半島の南端まで全部で十一里に行く自動車だ。それに乗っていると、やがて夕方が近くなってきた。村人を見かけなくなってきた。私は峠の隧道の所で、車から降りた。私は、私という不甲斐ない男を人里離れたところに遺棄したことに、気味のいい嘲笑を感じていた。

大きな谷に出くわし、遠くに滝の水を見た。「ここで日の暮れるまで坐っているのは何という豪華な心細さだろう」と思った。私は、あのいつもの病室にいたらどんなだったろうと想像した(浴槽の底で溺死しているか、寝床で悪寒の引くのを待っているかだろう)。

星が出だした。私は二、三里先の温泉宿まで行こうと考えた。山の凍てついた道を歩いて行くと、闇の中に昼の日差しがありありと見えた。空は真っ青になっていた。一台の自動車が過ぎていった。ヘッドライトの動きに、闇がどんどん進んでくる。何という絶望した風景だろう。私は、私の運命そのままの四圍のなかに歩いている。私はこんどは、「へたばるまで歩け！」と自分に鞭打った。

その夜遅く、私は船着場についた。静かな空気をやぶって、媚めいた女の声聞いた。しかしその声もいつしか諦めの声とともに消えていった。温泉場に向かう人らしき往来を見たが、どうやらそれは違っていた。私の充たされない残酷な欲望は、私にもう一度歩けと命じた。その後、幸いなことに自動車が一台やってきたので、それに乗せてもらって、やっと港町についた。漁師たちと白く化粧した女のからかい合いが聞こえた。一軒の宿に入ることができた。酌にきた女は、秋刀魚船の話をし、次にやや懇ろになれてから、私に姪をすすめたが、私は金を払っ

て外に出た。そして、回転灯台の灯をずっと見ていた。私の憎悪に充ちた荒々しい心は、この港の埠頭でもう尽きていた。

この港の付近の温泉で三日をすごし、私はまた村へ帰った。心配してくれた人々にすまない思いをしなが、悪化した体を静に寝床にやすませた。ここにはもう蠅はいなかった。彼らはそもそも、私がこの部屋にいただけで、その余徳を生存の条件にしていたのだ。私がいなくなったことで、彼らは本当に寒気と飢えで死んでしまったのだ。私はこれには憂鬱な感じがした。私にもきつと私を生かすか殺すかの条件があるはずだと思った。空想ではあろうが、その空想に私の生活はますます陰気さをくわえていった。

#### ○ ある感想

出口のない不安にあるとはこういうことをいうのか。輝かしいもの、澆刺としたものに、温かいものは人間になくはならないものなのに、それらに憎悪さえ抱く人もいる。しかし、同じ状況でもその反対の姿勢を静かに保持する人もいる。作者は、憎悪を持ちながらも最後には、生きる条件と殺す条件の二通りあることを意識している。本当に悲観論者なら、自分を客観視※する文体をとらないだろう。

※上記下線部に客観視の姿勢を見ることができる。

## IV ジュリアス・シーザー (シェイクスピア 英)

岩波文庫 中野好夫訳

キャスとキャシアスが、現在のローマの政治状況を憂いている。すなわち、政敵ポンペイウスをファルサスの戦いで破って以来、シーザーにとって、もはや恐いものはおらず、ローマ市民をすべて隷属させてしまっているかのような振る舞いが目立ってきていることだ。そういうことが続いており、明日も元老院では、シーザーを王にすることが承認されようとしている。(キャシアス)「ねえ、ブルータス君、僕らがうだつがあがらんというのは、運勢の星が悪いんじゃない。僕ら自身が悪いんだ」同 p24 と同じ趣旨のことをそばにいるブルータスにも同調を求めた。ブルータスを仲間に入れたかったのだ。確かにブルータスは高潔無比なローマ市民として、信望を集めていた。だからこそキャシアスはそう思うのだが、それとともにじれったく思うのだった。

このとき、シーザーのあとからついて歩く占い者が突然、シーザーに向かって、「3月15日に気をつけるように」と言った。シーザーはそれをかすかに聞きつけたが、別段それを気にしなかった。

自宅でブルータスは煩悶していた。ブルータスはシーザーと政治的に対立しているわけではない。シーザーが欲しがっている点を除けば、権力の弊害は力に倣り、憐憫の心を忘れることにある。正直に言って、あのシーザーという男、感情に溺れて、理性をなくしたという事例はかつて知らぬ。だが、謙虚がしばしば若い躍進の足場とする梯子だということはある。これだけは確かな事実だ。高きをのぞむ人間というのは、必ずこれに眼をつける。『まむしの卵、ひとたび孵えれば、

蝮の常で、必ず害をする。だから殻のうちに殺すのだ」同 p48

ブルータスの自宅には、この間からよく煽動文書が投げ込まれていた。そんなところに義弟キャシアスがブルータスの家にやってきた。翌朝はやく、キャシアスとブルータスは星の位置を計りながら、建物群をみつめていた。彼はしっかりと議事堂※の方を見つめた。そして仲間の関与を確認した。

※ シーザーの暗殺は、BC44年3月15日、ポンペイオス劇場(BC55年竣工)でおこったことだが、本作品では、シエクスピアは、これが議事堂でおこったことにしている。

なかでも、あのマーク・アントニーをどうするかだ。彼はシーザーにもっとも愛されている男だ。キャシアスはアントニーもいっしょに殺してしまおうと考えたが、ブルータスは、それはあまりに残忍すぎる。トレポニアスの意見にしたがって、生かしておくことにした。そんなとき、ブルータスの妻ポーシヤが、夫のことが気に入り、やってきた。夫は「もうおやすみ」と言うだけだった。

(シーザー邸) 妻キャルパニアが夫シーザーに、「きょうは外出なさってはいけません」と言った。昨夜、夢の中で夫が殺されると三度うなされたのだそうだ。それを聞いたシーザーは、すぐさま、神々に生贄をささげるように召使に指示を出した。シーザー意外にも、ここ数日、いろいろな人が異象を見たと言っている。――牝の獅子が街中で子を産んだとか、墓地が突然口をあけて中から死人を吐いたとか、だ。

シーザーは、『臆病者というのはな、死ぬ前に幾度でも死ぬのだ。ただ勇者だけは一度しか死の味を知らぬ』同 p70 と言い、なんでもないのでと説得した。が最後には妻の言うことを聞いて、外出しないことにした。そして召使のディシヤスに、「きょうは登院しないことにする」と伝えておいてくれ、と頼んだ。一方、ブルータス邸では、知らぬはずのポピリアスが「計画の上首尾を祈ります」と言うものだから、ブルータスは怪訝に思った。何かゴタゴタしている雰囲気嫌だった。

さて議事堂では、キャシアスはまず、シーザーにパプリアス・シムパーの件で、彼は赦免してやって欲しいと願い出たがシーザーはこれを赦さなかった、「あたかもあの北極星、確乎不動、蔽として動かぬ点では、全天その比を見ぬというあの星、あれがこのわしだ」同 p86 「炳として不動の位置を保つのはただ一つ。この世界もまたその通り」この判断に、シナもディシヤスも失望した。「シーザーにこうも跪いてもだめだったのか」とすると、「こうなれば、腕にものを言わせるだけだ」と皆は息巻いた。そして、議事堂で、まずキャスカが、次に一味の者たちが、最後にブルータスが、シーザーを刺した。「ブルータス、お前もか」同 p87 (シナ)「自由だ、解放だ」アントニーはどこだ、と探す声が聞こえたが、トレポニアスは「肝をつぶして逃げた」と言った。

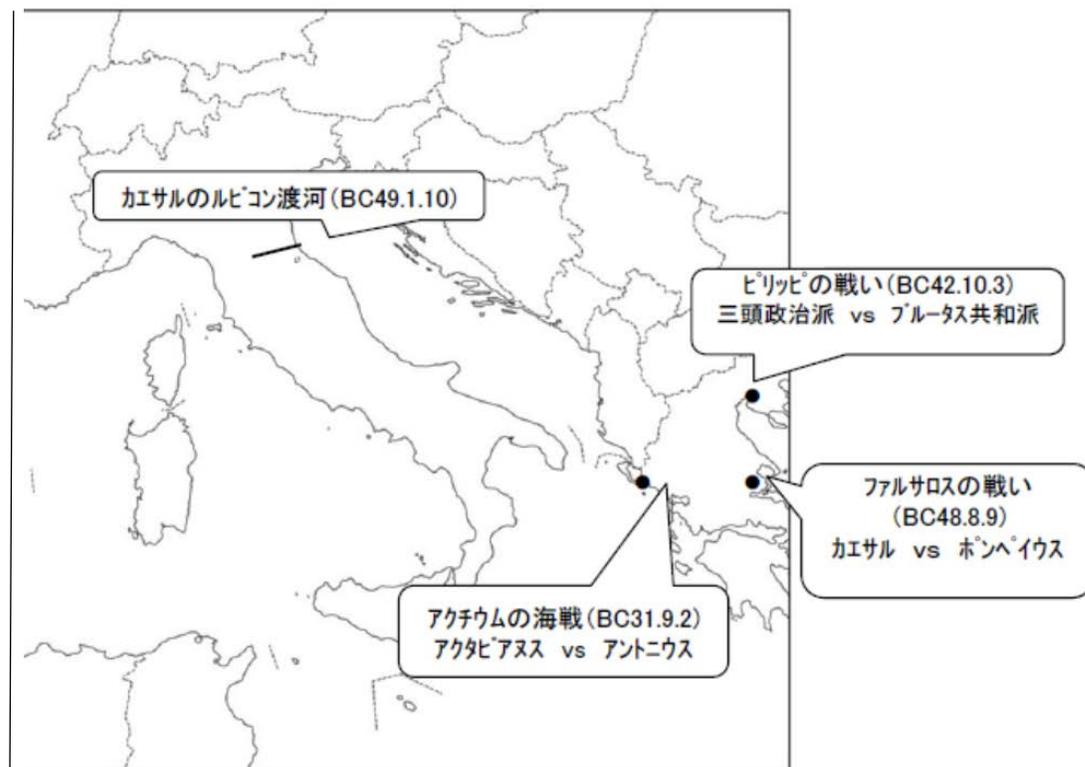
ブルータスは、『いまこのポンペイ像の台座に土塊同然の姿で倒れているシーザーも、今後いくど狂言の血を舞台上で流すことか！』『ブルータスが先頭だ、そしてわれわれはもっと勇敢、かつ最も高潔ローマ人として、彼の後につづこうではないか』同 p90 と凱歌をあげた。

アントニー家の召使が隊列の前にあらわれて、アントニー様は今後はブルータス様を敬愛申しあげます」と、手のひらを返したようなことを述べ立てた。キャシアスは「あの男、安心のならぬものがある」と語った。

ブルータスは、シーザーの骸がある前で、『全ローマの蒙るべき非道に対する惻隱の念が、シーザーに

対しこの行為を敢えてさせただけ、あたかも火の火を倒すように、惻隱が惻隱を圧倒し去ったのだ』同 p93,94 と演説した。そのあと、ブルータスはアントニーを見た。アントニーは、「君たちと握手したじゃないか。――ただ一つ聞きたいのは、なぜまた、このシーザーが危険人物だったのか、その理由についてだ」同 p97

市民はブルータスの演説を聴いた、『シーザーを愛する我輩の心の薄かりし故ではない。ただ、ローマを愛する心のより深かったがためということだ』同 p103 このとき、ブルータス 万歳！ 万歳！ という声が起こった。そして、このあとアントニーが、追悼演説をした。その要旨は、シーザーも、ブルータスも人格高潔の士と称えた。シーザーの遺言状を持っているが、それを読むのは控える、なぜなら読めば諸君は感激に興奮するのを惧れるからだ。同 p111 こういう言葉の巧妙な使い方に、「ブルータスこそ叛逆人だ」という声が澎湃として起こってきた。アントニーは「ではどうしても読めというんですね」と勿体をつけた。そしてシーザーの骸の周りに輪になって下さい、と呼びかけた。そして、「これが、キャスカの、これがキャシアスの、これがブルータスの刺し口です」と説明した。同p113 市民たちはそれを見て、口々に殺害者たちの恨みを、「ブルータスの家を焼き討ちだ」と叫んだ。するとアントニー側は、その暴動に加わった者らに金をくばった。アントニーは独りごちた、『あとは勢い、復讐の鬼め、腰を上げたな』同 p118



アントニーの自宅に、レピドゥスとオクタヴィアヌスが集まり相談していた。「ブルータス、キャシアスが兵を集めているようだ」と。一方、ブルータスの自宅では、ちょうどブルータスの妻ポーシャが亡くなったところで、キャシアスがブルータスを慰めていた。さて、アントニー側の3人の相談だが、彼らの軍は、いまフィリパイに向っているが、そこでブルータスに対し、元老院議員に対する殺害行為(シーザーだけでなく、多く)をもって、彼等に対し公敵宣言を出し、そして彼等に我々へ先に攻撃をさせる形をとるのが上策だということになった。同 p143

フィリパイの野 オクタヴィアヌスの陣では、「壺にはまってきたぞ」と観測していた。一方、キャシアスの陣では、キャシアスは昨日見た夢のころを気にしていた。——先日まで、戦旗のうえに留まっていた大鷲が、今朝になっていなくなったこと。——やがて戦闘が始まった。するとキャシアスの旗手が逃亡しだした。ここから全軍が総崩れとなり、ブルータスは最後に捕まってしまった。彼の仲間は大方は死んでいた。そしてブルータスは捕まってしまった。アントニーはこういった、——『ブルータスは一味のなかでも高潔無比ローマ人だった。彼一人を除く陰謀の徒党は、すべて大シーザーへの憎しみから、あの所作をしてかしたのだが、ただ彼だけにひとに国を思う誠心誠意と、万民の幸福を願うという一心から一味に加わったのだ』同 p176

布を渡している場面。2枚目は息子が、嘘つきの友人や恥知らずな女とつき合っている場面。3枚目は、零落した息子が襤褸をまとって三角帽をかぶり豚に餌をやっており、そして息子自身も豚と同じものを食べている場面。4枚目は、放蕩息子が父母のもとにもどり、ひざまずいて悔悛している場面。

われわれ3人は、ポンスやお茶を飲みながらしばらく談笑した。再び馬車で発つ準備ができたが、私は去りがたい思いがした。ドーナが余りに可愛くて情がこまやかだったからだ。私は彼女の頬にキスをする許しを得た。そして、ここでしばらく心地よい時間を過ごした余韻をかみしめながら再び馬車の人となった。それから数年して、私は再びその町を通過することがあったので、その駅にやって来た駅長は毛皮衣をひつかぶって寝ていたが、私の到着に目をさました。が、彼の顔の皺は深くなっており、以前のような輝きはなかった。私は、「ドーナはどうしてる」と訊いたが、彼はすぐさま眉をひそめ顔を曇らせた。そして、「あれのことなら神様だけがご存じでさ」とぶっきらぼうに答えた。私が彼にラム酒をすすめると、彼はようやくその不機嫌をすこしだけゆるめ、やがてゆっくりと語りだした。ものなあ」と困惑した言い方だった。——「君があれを取り返してみたらどうなる、——あれは私を愛している。あれはもう昔の身分なんてすっかり忘れてしまっているんだ」そう言って、大尉は駅長の袖の折り返しに紙を数枚入れて、駅長を外に体よく追い返した。駅長は街路に出てそれを見ると、それは50ルーブリ紙幣だった。彼はそれを地面に叩きつけて踏みこみじった。でも駅長はそれであきらめなかった。その後、大尉は辻馬車を駆って、ドーナの住まいに出かけた。駅長はそのあとを懸命に追跡した。すでに大尉がその家のなかに入ったのを確かめた駅長は、御者に「ドーナ様にお手紙を持ってまいりましたが、ご在宅ですか」と探ったところ、彼女は居るとのこと。そこで、駅長は小間使いの制止もきかず、強引に部屋に入り込んだ。ドーナは流行の粋を尽くした装いで、まるで乗馬婦人の姿勢のように、男の椅子の腕木に腰をかけて、やさしい眸を男に流していた。ドーナが「そこにいるのは誰？」と言っても、駅長は返事をしなかった。怒った大尉は駅長のほうに歩みよってきて、「まるで追い剥ぎではないか」といいながら駅長の腕をつかまえて、乱暴に追い出した。駅長はここであきらめることにした。宿に帰ると、知人は告訴すべきだと言ってくれたが、駅長はあきらめることにした。そして、彼はもとの村の駅にもどり、普通とおりの仕事に復帰した。それから3年たった。駅長は私に「どうせ、そのうちにあれは、捨てられてしまうのではないかと心配でね——」と言葉をもらした。そして、もうあきらめきった表情で、眼鏡を服の裾でふいた。私はそこを辞去した。しかし先ごろ、私はこの村を通過したことがあったので、何か因縁めいたものを感じ、箱馬車を借りてこの地を訪れた。しかし、そこには、あの駅長はおらず、代わりに、ビール醸造人一家が入っていた。その女房に駅長の消息を訊いてみたが、彼は酒の飲みすぎで亡くなったとのこと。私がせめてその墓に参りたいというと、その女房は息子に墓への道を案内させてくれた。途々その息子は、「以前、豪華な馬車に乗った一人のきれいな女の人が3人の子どもと乳母と黒い狎を連れて墓参りにきたよ。その人は、傍で見ていたおいらに5コペイ銀貨をくれた。いい奥さんだった」とか、「墓の前で突っ伏してさめざめと泣いていたよ」と語ってくれた。私もその少年に5コペイ銀貨をやった。私には何の血縁もない、ただ一時、この駅で出会った駅長とその娘のことで、しかもわざわざ7ルーブリと5コペイの金を使ってまで、ここへ寄ったわけだが、でもそのことを決して惜しいとも余計なこととも思わなかった。

## V ベールキン物語～駅長～ (プーキン 露)

- 登場人物
- 私
- 駅長
- ドーナ(アブドーナ・シメオン・ノバ) 駅長の娘
- ミンスキー 大尉
- その従卒
- 引っ越してきた女房とその子ヴァンカ

参考: 岩波文庫 神西 清 訳

私の回想——ロシア各地に張り巡らされた駅馬路の駅長は、一般に踏ん反り返って、いつもえらそうにしている始末の悪い権力者というイメージが強いが、私はそうは思わない。私はもうかれこれ二十年にわたってロシアをあちこち旅したが、ほとんどの駅長は細やかな情けを示す人だ。彼らは14等官という身分ながら、現場をあずかっていることから、現場の仕事をこなす限りでは、独裁者のように見られているが、それは見まちがえというものだ。ここに私の友人の駅長の話をしよう。181年5月のことだった。私はある県にいく用事があった。駅の手前で雨に降られてものだから体はすっかりぬれてしまった。難儀をして駅についたが、駅では、駅長とその娘のドーナという14.5歳くらいの娘さんに親切にもらった。駅長の指示でドーナはサモワルの熱いお茶を入れてくれたし、服も乾かしてくれた。駅長が私の駅馬券を写し取っている間に、私はこの駅舎の部屋の中をながめ渡していた。こぎれいな飾りの中に、絵草紙※が4枚掛けられていた。

※1枚目は、富裕な家庭の父親が放蕩息子の気まぐれな旅立ちを見送りながら祝福と財